

第1回日本リメディアル教育学会関東甲信支部研究大会  
2012年3月10日 早稲田大学

## 熟達度から見た楽しい英語授業に対する 大学生の評価と経験度の違い

鈴木政浩(西武文理大学)

### 本日用意した資料

- パワーポイントスライド(本資料)
- 英語の授業に関するアンケート調査質問紙(資料1)
- 各要素に該当する下位項目の内訳(資料2)
- 「楽しさ」5要因に含まれる質問項目等(資料3)

問題の所在 表1 英語授業の「楽しさ」に関する研究

概要	
英語を話す活動で、自分の言いたいことを英語で伝えることのできる「楽しさ」	兼重・藤井(2004) 神林(2005)
リーディングの活動で、英文の内容がわかるようになる「楽しさ」 個別の技能や活動に関する「楽しさ」	竹村(2007) 長碕(2010)
ペアワークやグループワークなど相互交流的なコミュニケーション活動の「楽しさ」	菅原(2004) 小林(2009)
授業がわかる「楽しさ」や英語を学ぶこと自体の「楽しさ」英語学習全般に関わる「楽しさ」	星野他(2003) 星野他(2004)
高等教育の視点から「理想とする(英語)授業」	大学英語教育学会(JACET)授業学研究委員会編著(2007)
動機づけに関わる質問紙調査により因子分析「以前に学習経験のあるものはその後も学習する可能性が高い」	小磯(2005)
学齢が上がるにつれて英語を楽しいと感じる割合が減少する	倉八(1996)

帰納的な「楽しさ」の探索。活動後に「楽しさ」の要素を引き出したり、経験的な知見から「楽しさ」の部分的な側面に言及している。

## 問題の所在

「楽しさ」の要素 森住(1980)



表2 鈴木(2011a)「楽しさ」の9要素

1. 安心して参加できる楽しさ	2. わかる楽しさ	3. できる楽しさ
4. より深く知りたいと思う楽しさ	5. 成長する楽しさ	6. 参加・表現できる楽しさ
7. 個別に取り組む楽しさ	8. 変化に富む楽しさ	9. 成績と関係ない楽しさ



質問紙調査による5因子構造の提案(鈴木,2012b)

要素: 経験から得られた分類

要因: 統計手法(因子分析)により得られた分類

3

### 9要素の内容

1. 教師が親しく、安心して質問できる、単語の発音など初歩的な質問も馬鹿にされない安心感
2. 説明してもらったこと(文法事項等)が理解できたり、意外なこと(thirteenはthree+tenからできた、hotはheatの元になっているなど)に感動できるという満足感
3. 理解したことをもとに練習問題に取り組んで正解に結びつく達成感
4. 「わかる」「できる」経験から、さらに別のことを知りたいと思う知的好奇心の向上感
5. 授業者の賞賛や、難しいと考える課題をクリアすることで自分の成長を確認できる充実感
6. 個人やグループで発表・表現し授業に貢献できる帰属感
7. じっくり考えて取り組む内省的取組の楽しさ
8. ゲームやパソコンを使うなど様々な活動に取り組む楽しさ
9. 英語の歌や洋画など、成績評価に結びつかない内容と取組

## 英語授業における「楽しさ」の5因子

表3 中高大学生の考える英語授業における「楽しさ」の5因子

	因子名	内 容
第1因子	参加表現因子	個人、グループの発表や英語で表現する楽しさに関わるもの
第2因子	言語文化的知識因子	海外の文化、国々、語源、表現を学ぶ楽しさに関わるもの
第3因子	教科書外因子	教科書で学ぶ以外のことを学ぶ楽しさに関わるもの
第4因子	熟達因子	できるようになる楽しさに関わるもの
第5因子	多様な学び因子	ピンゴやパソコンを使った多様な学びの楽しさに関わるもの

資料1 「英語の授業に関するアンケート調査」質問紙

4

### 対象者

関東近県の中学生・高校生・大学生1060名(うち欠損値のあるケースを省いた888名のデータを使用)

実施期間 2011年4月から5月

### 方法

英語授業における「楽しさ」要因(鈴木, 2011c)の確証的因子分析

## 問題の所在

表4 「楽しさ」と熟達度の関係に言及した研究

概要	
1) 相互交流的な活動の「楽しさ」コミュニケーション活動の中で「できる」「楽しい」という意識を高める	菅原(2004)
2) 楽しく英語の力が付く活動を分類	星野他(2003)
3) 学ぶ「楽しさ」と確かな学力の関係に言及	星野他(2004)
4) 「楽しい」が学力に結びつかない実態	斉藤(2002)
5) 「楽しさ」と熟達度は学習者の意識の中で両立していないことを示唆	小磯(2005)
6) 「楽しさ」の要因と熟達度に因果関係が認められない	鈴木(2011b)

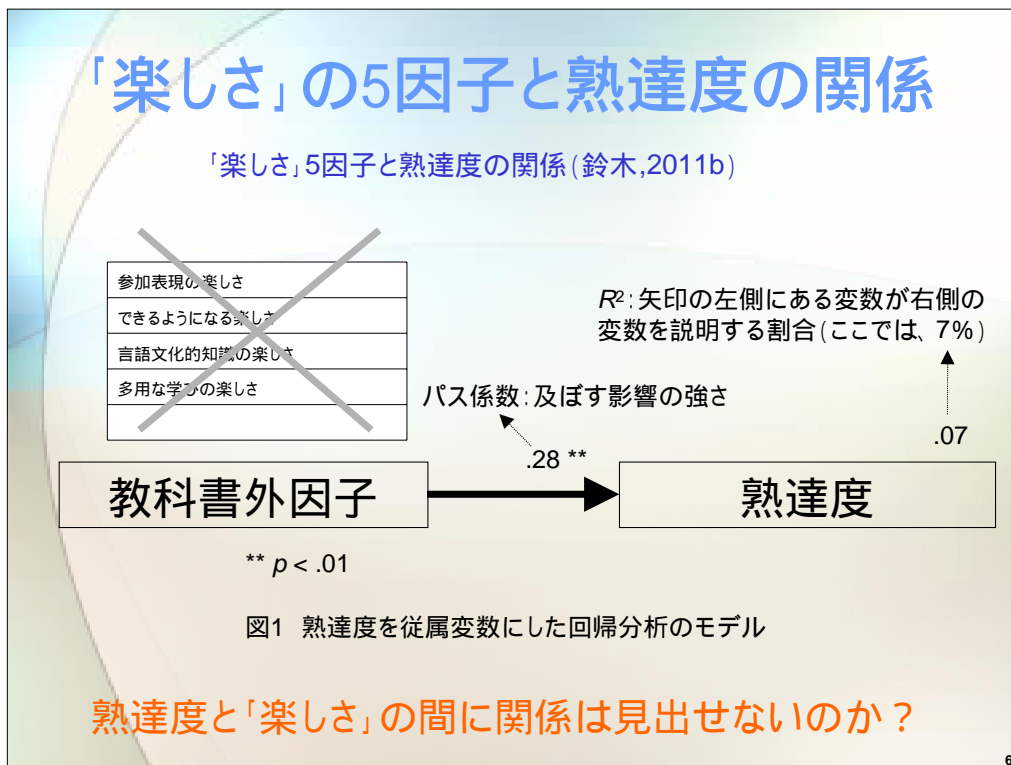


学力形成の点で、楽しい英語授業に対する2つの異なった見解

5

1)から3): 楽しい授業が学力に結びつくことを前提とした見解

4)から6): 楽しい授業と学力の間に因果関係を見出せないことを示した見解



熟達度に影響を与えていたのは「教科書外因子」のみ。しかも、調整済みR<sup>2</sup> = .07と、熟達度のおよそ7%程度の分散しか説明していなかった。

対象者

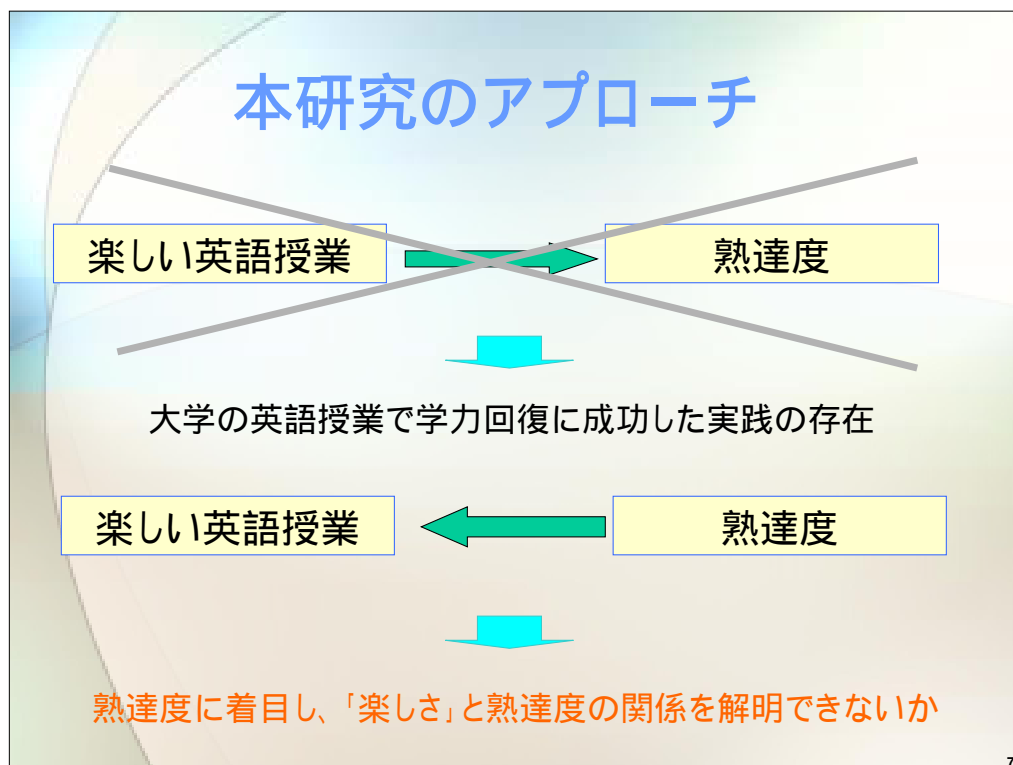
埼玉県内の大学1年生101名(質問紙調査と同時に英検抜粋問題を実施し「熟達度」とした

期間 2011年4月

方法

熟達度を従属変数に、各因子の平均値を独立変数とした(探索的)重回帰分析

変数増加法: 投入可能な変数を1つずつ増やして行く分析手法



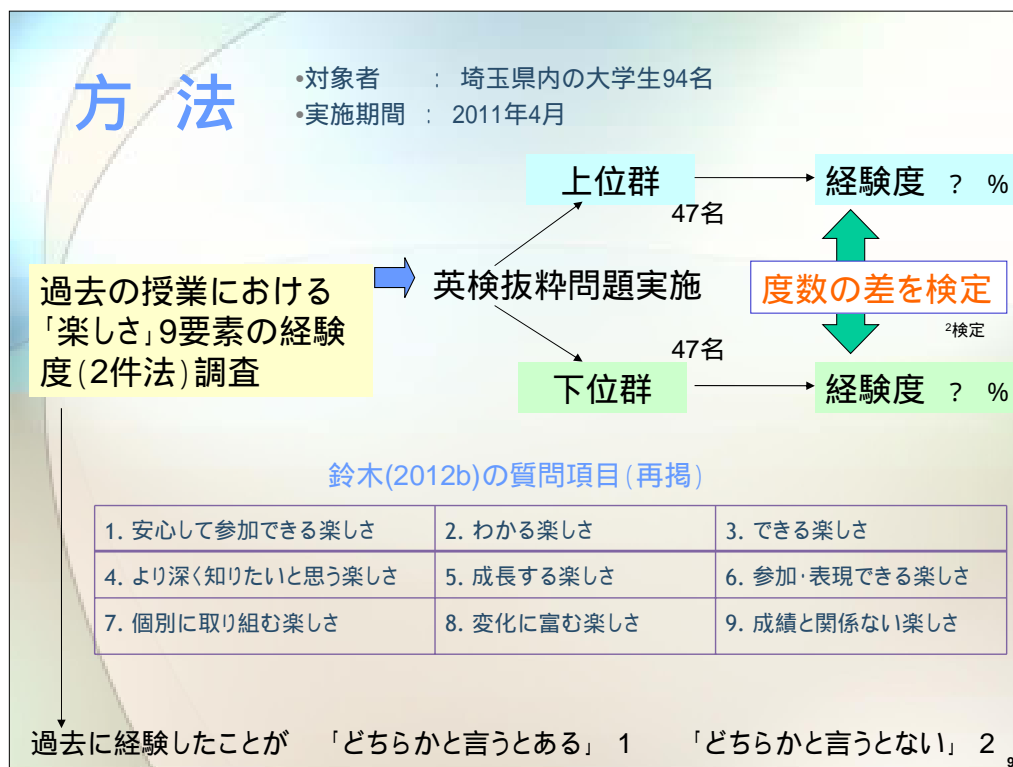
英検3級受験レベルの学生を対象に、音声指導を中心にリスニング能力の向上を確認した研究 (Suzuki&Akutsu, 2009)や洋画のアフレコを成功させた事例 (鈴木, 2011a)

楽しい英語授業が熟達度に結びつかない原因を探りたい。

## 研究1 目的

1. 熟達度が高い群の対象者は、どのような「楽しさ」を経験して来たと考えているのだろうか？
2. 下位群との違いは何か？



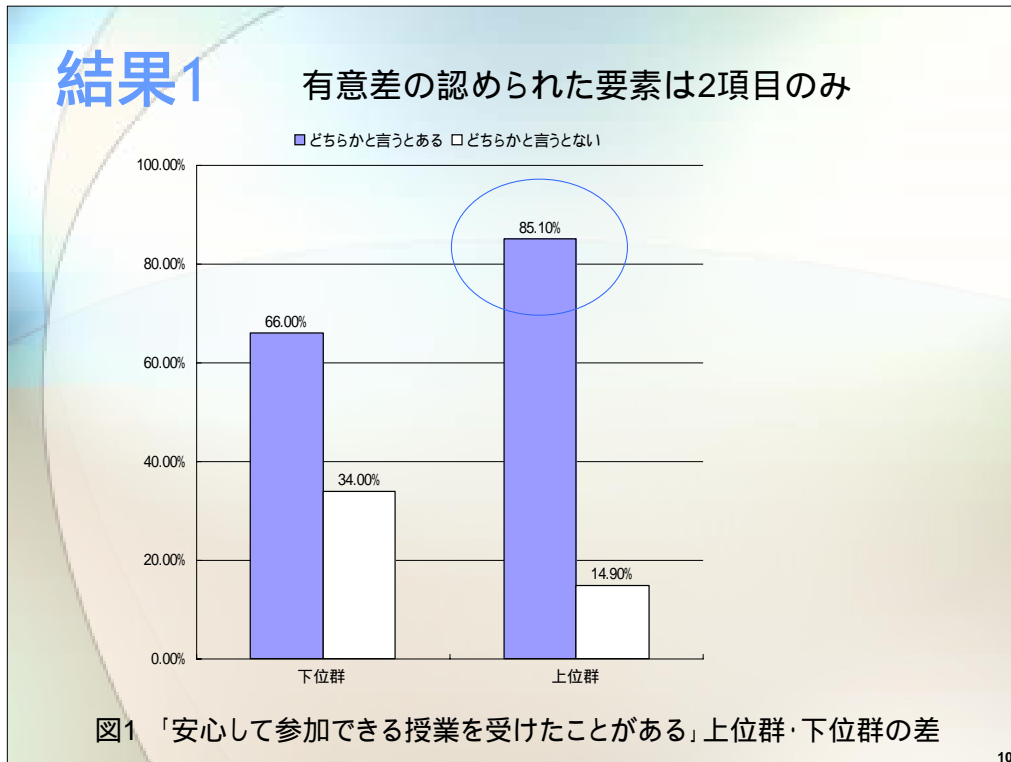


対象者 関東近県の大学1年生94名  
(熟達度上位群47名、下位群47名)

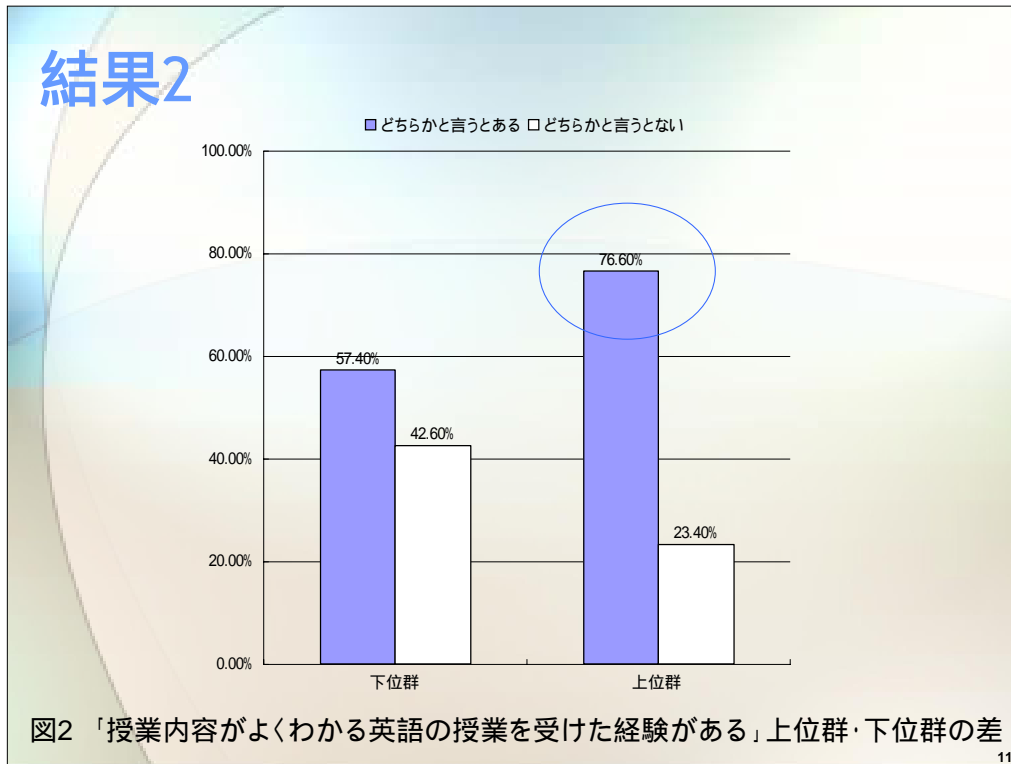
実施期間 2011年4月

方法

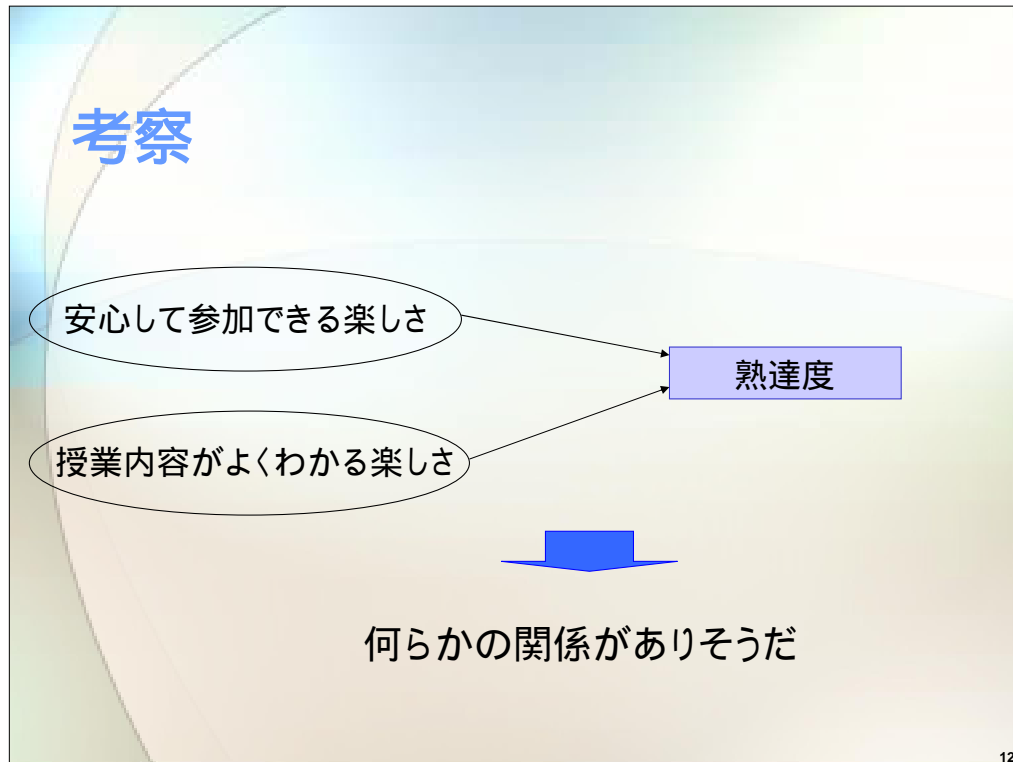
- 熟達度:英検3級および準2級の抜粋問題
- 過去に受けた「楽しい英語授業」の経験度を熟達度上位群と下位群で比較する(ノンパラメトリック検定)2件法9項目からなる質問紙(資料1 質問1から質問9)
- 鈴木(2012b)における質問紙を使用(質問1から質問9)
- 熟達度上位群・下位群における9種類の「楽しさ」経験度について、度数の差をノンパラメトリック検定 スライド28



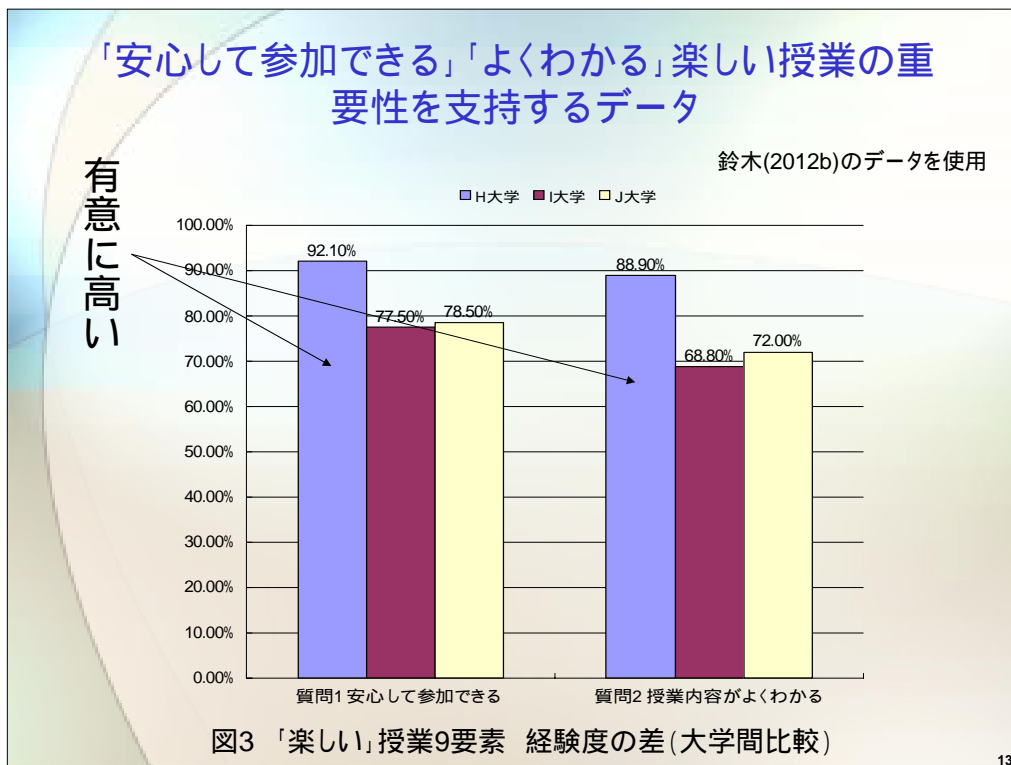
記述統計量:スライド29



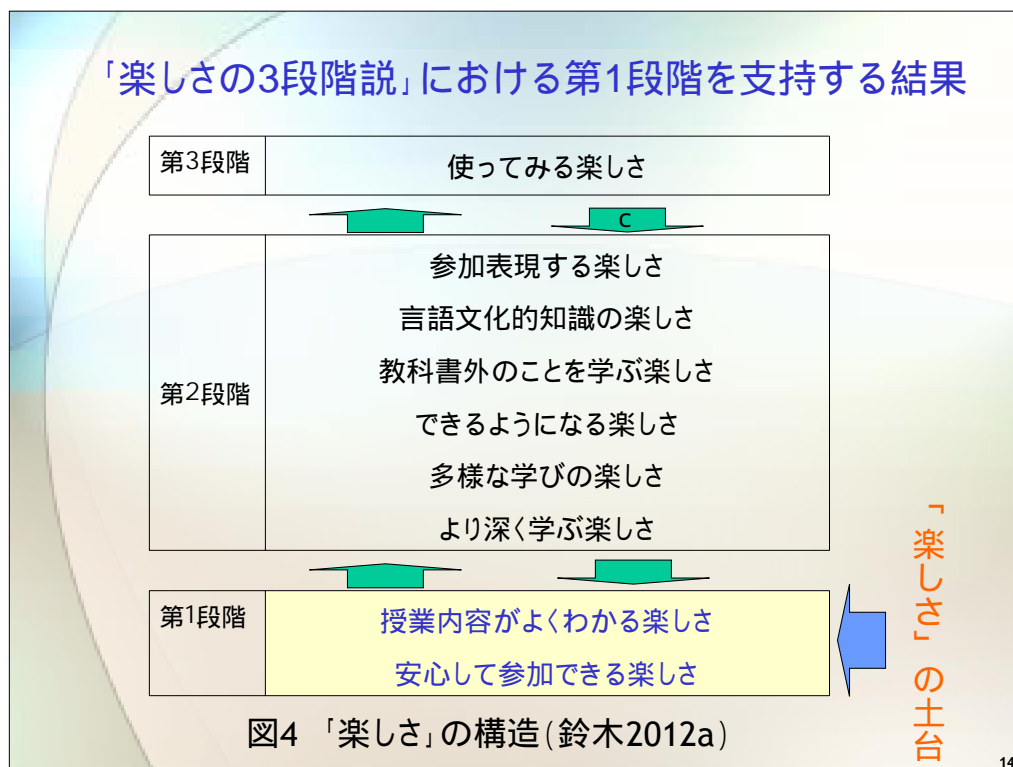
記述統計量:スライド30



「安心して参加できる楽しさ」「授業内容がよくわかる楽しさ」を授業で経験すると、後の英語学力形成に影響を及ぼす可能性を示唆。



n=357, ノンパラメトリック検定の結果、「どちらかと言うと経験がある」の度数に有意な差が認められた質問項目( $p < .05$ )。H大学は他の2大学と比べて熟達度が高いと考えられる大学であり、ここでも「安心して参加できる」「授業内容がよくわかる」の経験度が有意に高かった。



## 研究2 目的

1. 熟達度が高い群の対象者は、どのような「楽しさ」を高く評価しているのか。
2. 下位群との違いは何か

### 鈴木(2011a)「楽しさ」の9要素(再掲)

1. 安心して参加できる楽しさ	2. わかる楽しさ	3. できる楽しさ
4. より深く知りたいと思う楽しさ	5. 成長する楽しさ	6. 参加・表現できる楽しさ
7. 個別に取り組む楽しさ	8. 変化に富む楽しさ	9. 成績と関係ない楽しさ

## 方法

- 対象者(研究1と同じ)
  - 関東近県の大学1年生94名  
(熟達度上位群47名、下位群47名)
- 実施期間(研究1と同じ)
  - 2011年4月
- 方法
  1. 鈴木(2012)の質問紙(1つの要素につき5つの質問項目)を使い、各要素における下位項目の信頼性係数を算出する。  
資料1(質問10から質問54)
  2. 9要素平均値の差を上位群と下位群で検定し、どの要素に有意な差が認められるかを検証する(独立サンプルのt検定)。

16

回答の傾向がどの程度同じかを信頼性係数(Chronbachの )で検証。

1つの要素につき、5つの質問(下位項目)があるため、その信頼性係数を確認後平均値を算出。



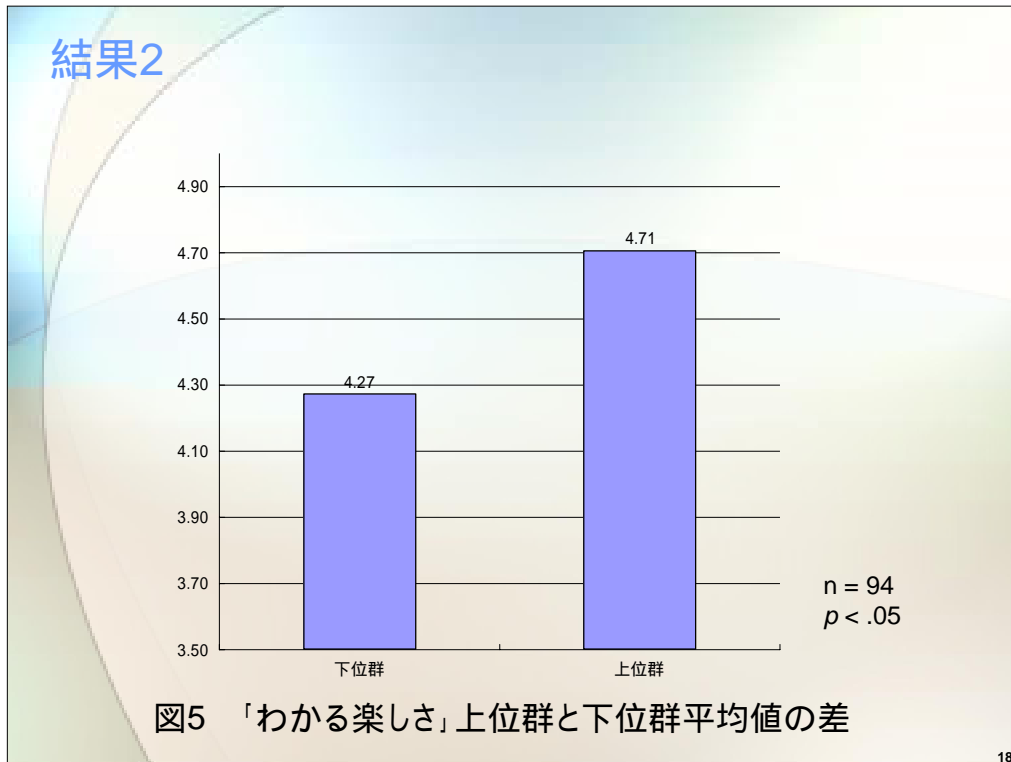
## 結果1 9要素下位項目間の信頼性係数

表5 9要素下位項目間の信頼性係数一覧

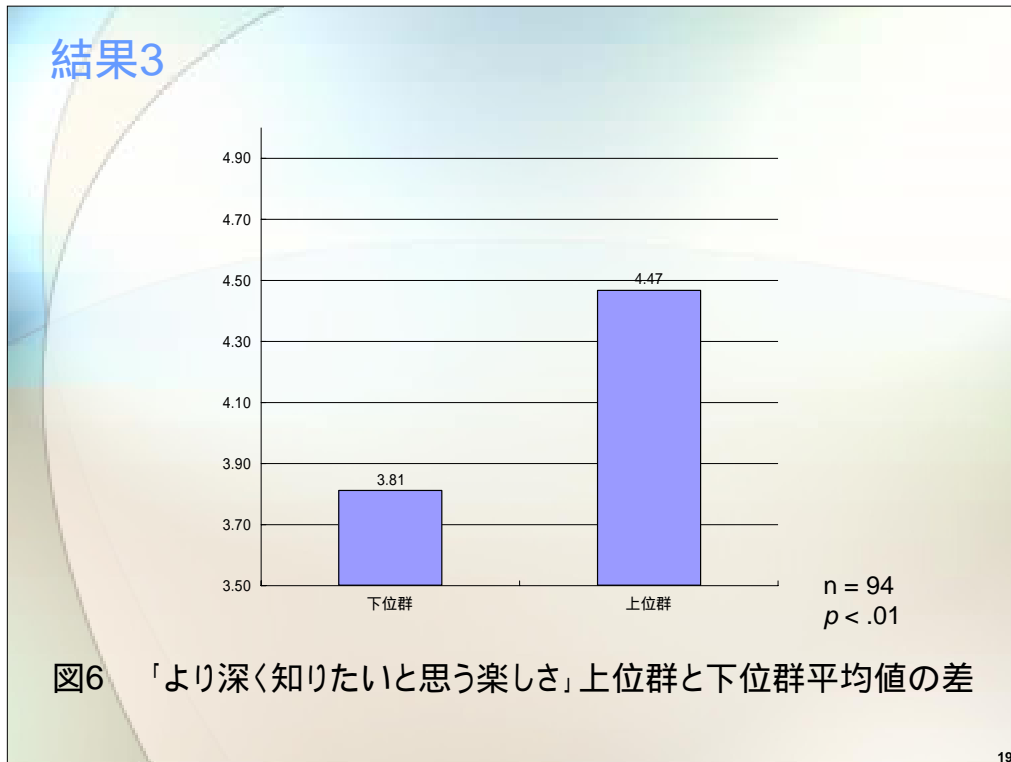
9要素	
1. 居場所のある楽しさ	.77
2. わかる楽しさ	.84
3. できる楽しさ	.88
4. より深く知りたいと思う楽しさ	.82
5. 成長する楽しさ	.88
6. 参加・表現できる楽しさ	.91
7. 個別に取り組む楽しさ	.78
8. 変化に富む楽しさ	.83
9. 成績と関係ない楽しさ	.81

17

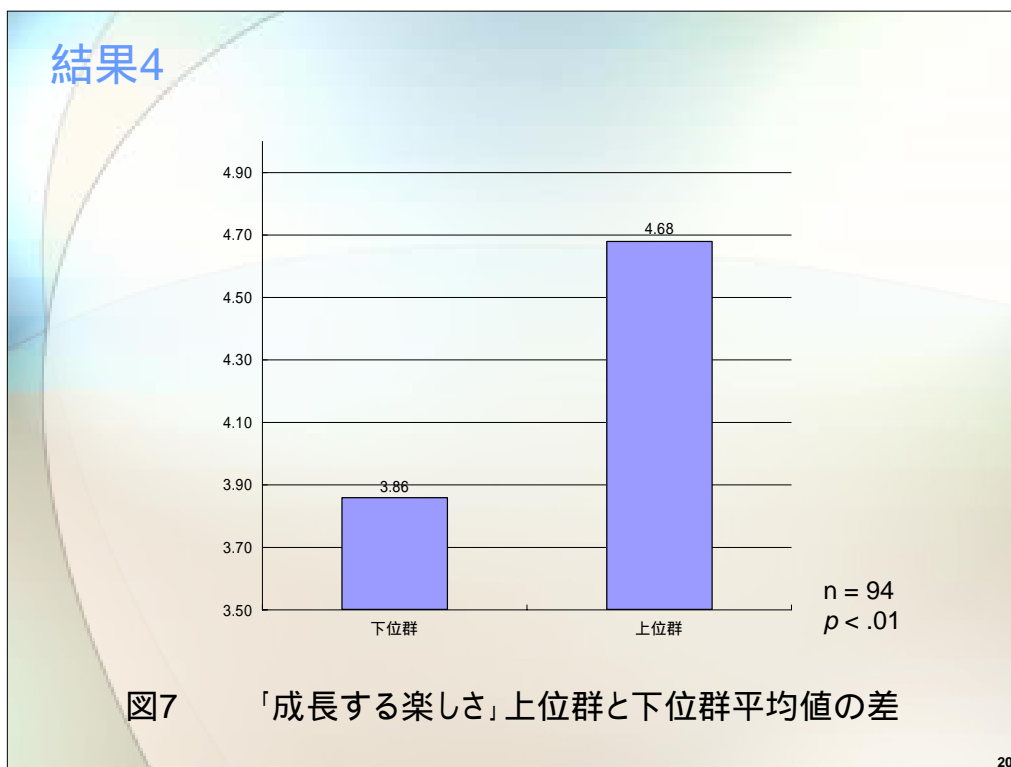
>.80で信頼性が高いと考える(質問間の回答傾向は同じ)。



上位群は下位群に比べ「わかる授業は楽しい」と考えている可能性(100点満点で5.7点の差)。



上位群は下位群に比べ「より深く知りたいと思う授業は楽しい」と考えている可能性(100点満点で11点の差)。

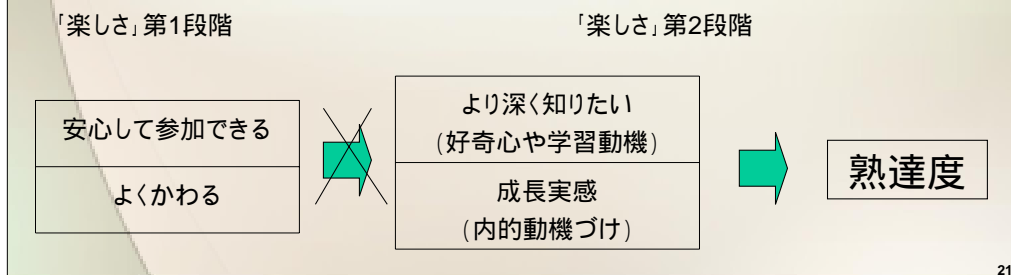


上位群は下位群に比べ「成長したと感じる授業は楽しい」と考えている可能性(100点満点で12点の差)。

## 考察1

下位群は、「わかる楽しさ」に対する評価が有意に低いため、英語授業に対する意欲や授業を通じての成長実感が上位群に比べ乏しい可能性。

意欲や成長実感格差の可能性(小磯,2005)。  
内的動機づけ(縫部, 1986)格差



小磯(2005):「以前に学習経験のあるものはその後も学習する可能性が高い」

楽しい学習経験がないと学習が促進されない

学力・学習意欲格差

## 考察2

「安心して参加でき」「わかる」授業により、**学力回復の可能性あり。**

## 考察3 「楽しさ」の質の問題

「楽しさ」第1因子

### 参加表現する「楽しさ」の下位項目

鈴木(2012b)

1. 個人の発表がうまくいく英語の授業
2. ペアで会話練習ができる英語の授業
3. 考える活動とグループ活動の両方がある英語の授業
4. 自分で書いた英文の内容が友だちにわかってもらえるような英語の授業
5. グループの発表がうまくいく英語の授業
6. 自分の考えを英語で表現できる英語の授業



コミュニケーション活動 + 表現 + (内省的)思考

23

学力形成には「じっくり考える楽しさ」も必要

## 本研究の限界と課題

- 学習者要因の問題  
理解力・記憶力 ↔ 「楽しさ」の経験
- 熟達度の測定方法の問題等の要素
- 「楽しさ」の因子相互の因果関係

24

理解力や記憶力が高いから「楽しい授業」の経験度が高いという可能性。



## ホームページ等の情報

- 鈴木政浩のホームページ: <http://msuzuki.sakura.ne.jp/>
- メールアドレス: [suzuki6111@gmail.com](mailto:suzuki6111@gmail.com)
- メーリングリスト: [join-classology.ZBFK@ml.freeml.com](mailto:join-classology.ZBFK@ml.freeml.com)

こちらに空メールを送信していただければ登録手続きが完了します。

「よりよい英語授業」に関する研究や実践に関する交流をお願いできる方はご連絡下さい。

25

## 参考文献

- 星野百合子・川島聡史・大兼敦子(2003)『学ぶ楽しさ』を実感できる授業の実践』『第48回(平成15年度)公開研究発表会外国語科(英語)発表要項』87-98.
- 星野百合子・川島聡史・大兼敦子(2004)『実践的コミュニケーション能力の育成：『学ぶ楽しさ』を実感できる授業への改善を通して』『宇大付属中研究論集』52, 80-93.
- 神林裕子(2005:30)『雪まつり』での国際交流活動の有効性 - 子どもの『楽しさ』や『英語で相手とコミュニケーションを図ることの慣れ』の観点から - 』『北海道教育大学紀要, 教育科学編』, 55(2):27-33.
- 兼重昇・藤井浩美(2004)『チャットシステムを利用した英語ディスカッションの試み』『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』1, 27-35.
- 倉八順子(1996)『英語学習の学習意欲の発達』『名古屋大学教育学部紀要』43, 2-7.
- 小林友宏(2009)『英語を通して何を学ぶか - カナダ国際交流研修旅行を通して - 』『大阪教育大学紀要』第57巻第2号 21-29.
- 小磯かをる(2005)『日本人英語学習者の動機付け-JGSS-2003のデータ分析を通して-』『JGSSで見た日本人の意識と行動：日本版General Social Surveys研究論文集』4(JGSS Research Series No.1), 79-91. 大阪商業大学
- 森住衛(1980)『楽しい授業とは何か』『英語教育』4月号, 56-57 大修館書店
- 縫部義憲(1986)『教師と生徒の人間づくり - グループ・エンカウンターを中心に』瀝々社
- 斉藤英二(2002)『楽しければそれでいいのか』『語研ジャーナル』(3), 93-96
- 菅原栄子(2004)『教師中心の英語授業から相互交流的な英語授業へ：相互交流活動は生徒の学習にどのような効果があるか』『岩手大学英语教育論集』第6号, 35-54.
- 長碓政浩(2010)『外国語教育におけるReading Workshop導入の試み』『高知工科大学紀要』7(1), pp143-151.

- SUZUKI, M.&AKUTSU, H. (2009) The Effects of Repeated Reading on Listening Comprehension of University Students. To Acquire Decoding Skills through Computer Assisted Language Learning. 『紀要』第16号, 国際教育研究所
- 鈴木政浩(2011a)「大学における『楽しい』授業の創り方」『新英語教育』No.501, 10-12
- 鈴木政浩(2011b)「英語授業の『楽しさ』を構成する要因とその相互作用に関する研究 英語授業学研究からのアプローチ」全国英語教育学会第35回山形研究大会
- 鈴木政浩(2012a)「英語授業における『楽しさ』の構造」『紀要』第17号国際教育研究所
- 鈴木政浩(2012b)「英語授業における『楽しさ』の要因に関する研究」『関東甲信越英語教育学会誌』第26号(in print)
- 竹村雅史(2007)「函館高専に於ける英語多読指導の試み - 最終報告 - 」『函館高専紀要』41, 113-117.

## ノンパラメトリック検定 ( 2検定 )

- **パラメータ(変数)を設定しない検定法**
  - 変数: テストの平均値、6段階で回答したアンケート調査の値や平均値等
  - 検定: 生じた差等が偶然に生じたものか、意味のある(有意なもの)かを確率で示す方法。
  - 5%水準で有意: 同じ結果が95%の確率で観測できる
- **サンプル数や分布によらない**
  - 例: ハンバーガーとポテトの売り上げ額の差が、A店とB店でどの程度の確率で生じるのかなど

## 記述統計量

「安心して参加できる英語の授業を受けた経験がある」出現度数と割合

	下位群	上位群
「どちらかと言うとある」度数	31	40
	66.00%	85.10%
「どちらかと言うとない」度数	16	7
	34.00%	14.90%
度数合計	47	47
%合計	100.00%	100.00%

<sup>2</sup>検定  $p < .05$  (両側)

## 記述統計量

「授業内容がよくわかる英語の授業を受けた経験がある」 出現度数と割合

	下位群	上位群
「どちらかと言うとある」度数	27	36
%	57.4%	76.6%
「どちらかと言うとない」度数	20	11
%	42.6%	23.4%
度数合計	47	47
%合計	100.0%	100.0%

<sup>2</sup>検定  $p < .05$  (両側)

## 結果1

上位群と下位群で有意な差が認められた3要素と記述統計量

要素	熟達度	平均値	標準偏差
2. わかる楽しさ *	下位群	4.27	1.21
	上位群	4.71	0.90
4. より深く知りたいと思 う楽しさ**	下位群	3.81	1.09
	上位群	4.47	0.96
5. 成長する楽しさ **	下位群	3.86	1.19
	上位群	4.68	1.10

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$   $n=94$

ここでも「わかる楽しさ」について、熟達度上位群の評価が有意に高い。

31